

体験博物館 千葉県立房総のむら館報

「房総のむら」は、参加体験型の博物館です。原始・古代から近・現代までの衣・食・住・技の移り変わりを、当時の環境の中で、直接体験することができます。

開館時間 9:00～16:30
休館日 月曜日（休日の場合は開館し、翌日休館）
年末年始（2023年12月26日～2024年1月2日）
臨時休館日 2024年1月5日、2月6日
入場料 一般300(240)円 高大学生150(120)円
※中学生以下と65歳以上無料
※障害者手帳をお持ちの方と介護者1名無料
()内は20名以上の団体料金

瓦版

大木戸

Kawaraban OKIDO

Vol.71

2023年（令和5年）9月30日

編集・発行
千葉県立房総のむら指定管理者
公益財団法人千葉県教育振興財団房総のむら
〒270-1506 千葉県印旛郡栄町龍角寺1028
TEL.0476-95-3333
<http://www2.chiba-muse.or.jp/MURA/>

千葉県誕生百五十周年記念事業トピックス展 「千葉の行商―小さなからだと大きなカゴと―」

房総のむらが位置する北総地域は、東京に隣接する地の利を活かし、農村部から多くの女性が列車を使い、東京へと行商に行っていました。かつて列車の中で、大きなカゴを背負った行商の女性たちを見たことがある方もいらっしゃるかもしれません。

千葉の行商は、大正期に始まったといわれています。関東大震災や印旛沼周辺を襲った洪水などの災害、戦後の食料難を経て、昭和三十年代にピークを迎えました。千葉の行商の特徴は、自作の野菜をカゴいっぱい詰め、列車を使い東京へと行商に出ていることです。鉄道会社も行商専用列車を運行するなど、ピーク時には九千人近い人々が行商に携わっていたといわれています。昭和四十年代以降は、女性の社会進出による職業の多様化、近郊の都市開発など農村部の人々の生活も変化していき、行商に携わる人々は減少の一途をたどっていきました。

本展は次のような展示構成で、行商の担い手であった女性たちの姿を中心に、行商の盛んだった頃のなつかしい風景や生活の様子を写真や聞き書きをもとに紹介します。

第1章「行商の移り変わり」では、千葉の行商のはじまり、戦前・戦後の行商、高

度経済成長期の行商と移り変わる行商の歴史を振り返ります。『増田實日記』（我孫子市教育委員会所蔵）や『行商発達史』（個人蔵）などの歴史資料を展示します。

第2章「行商の原風景」では、行商に携わってきた女性たちへの聞き取りをもとに、当時の行商の様子や生活について振り返ります。JR成田線湖北駅で実際に使用されていた行商台（当館保管）を展示し、当時の行商の風景を再現します。また、行商の女性たちの装いや行商カゴを作り上げる職人の技についても紹介します。

第3章「行商のいま」では、令和の行商として、現在もなお、東京へと行商に出ている女性たちを紹介します。また、地域活性化を目指す農産物直売所や行商の経済活動を引継ぎ、地域に根付いた販売を行う買い物難民の救世主・移動スーパー「とくし丸」についても紹介します。

今年には千葉県誕生から百五十周年を迎えます。小さなからだで大きなカゴを背負った行商の女性たちの姿は見られなくなりましたが、その姿は形を変え、未来へと引き継がれています。地域と都市をつなぎ、時代とともにたくましく生き抜いてきた行商の女性たちの生活の一端を振り返ります。

（広報・普及グループ 水島）



昭和40年代盛んだった行商 安食駅（栄町提供）



京成大和田駅「荷」の看板をつける行商専用列車（八千代市提供）

伝統文化入門

「落語のしぐさ入門」

伝統文化入門は伝統芸能などの実演や体験を通じて、日本文化への理解を深めてもらうことを目的に、普段の体験にはないテーマを設定し、年三回実施しています。今年度、第二回目は、八月二十日に金原亭馬太郎氏を講師にお迎えして「落語のしぐさ入門」を開催。子どもから八十代まで、一部、二部合わせて三十四名の方がご参加くださいました。

講座は落語の実演からはじまり、一部では「元犬（もといぬ）」を、二部では「真田小僧（さなだこぞう）」をご披露いただきました。どちらも親しみやすい演目だったこともあり、子どもたちを中心に笑い声が響き大変盛り上がりしました。



落語実演の様子

プロの落語を堪能した後は、仕草の体験です。まず先生から、扇子を使った、そばを食べる仕草を教わります。参加者の皆さんも、お配りした扇子と手ぬぐいを使いな

がら、そばをすする様子を上手に再現していました。

そしていよいよ体験の目玉、希望者に高座に上がってもらいます。それぞれ自分で考えた食べるしぐさを、先生の羽織を借りてクイズ形式で披露します。扇子を、どうもろこしやスイカに見立てて見事なしぐさをみせていて、正解が客席から飛ぶと、会場が拍手に包まれました。「高座に上げれる滅多にない貴重な機会でした嬉しかった」ととても喜んでいただきました。



高座に上がって仕草を披露

最後は質問コーナーで落語にまつわる疑問を先生にぶつけます。特に落語が大好きだというお子さんからの「どうやって落語の世界に入ったのか？」という質問に、作家として生きていく厳しい道のりと楽しさを、真剣に答えてくださっていたのが印象的でした。

普段の寄席に行くのとは違った機会です、参加者の皆さんが新たな視点で落語を楽しむきっかけとなれば、嬉しいです。

(広報・普及グループ 中村)

農家 下総の農家

「犬供養」

房総のむらでは四月十六日に「犬供養」と呼ばれる行事の実演を行いました。「犬供養」とは、死んだ犬を供養する行事で、東関東から東北南部にかけて見られますが、千葉県・茨城県・栃木県では特に安産祈願として行われます。これは、犬は「お産が軽い」ためあやかりたい、お産で死んだ犬を供養すると安産になる等言われていたためです。子供を産む年代の女性により構成される女人講（子安講や十九夜講）によつて行われます。毎年決まった日に供養の文言を書いた二股の枝「ザクマタ・ザガマタ（大卒都婆とも）」を、鉦や太鼓をたたきながら村境の辻に立てます。この時に線香をあげたり、白い紙を結んだり、握り飯を入れた「ツトコ・ツトッコ」と呼ばれる稲藁で作られた入れ物を掛けたりします。地域によつては、女性がお産で亡くなった、犬がお産で亡くなった場合にも行います。供養の文言も地域によって異なります。

房総のむらでは印旛郡栄町龍角寺の事例を再現しています。二股に分かれているネムの木の枝を切って削り、供養の文言を書きます。そして村はずれの道の分かれている所に立て、握り飯入りのツトッコを掛けます。表面の二股部分の右側に「迷故三界城悟故十方空」、左側に「本来無東西何処有南北」とあります。またY字の下半分には「**ハニイマカ**（キヤカラバア）**ウツクイ**

を**ハニ**（オンアピラウケン）爰志者爲汝是傍生畜養供養菩提也」とあります。裏面の二股部分には、両方も「**ハニイマカ**（ハニイマカ）**ハニイマカ**（オンアピラウケン）」とあり、Y字の下半分には「南無遍照金剛和曆〇〇年〇月」とあります。この地区での塔婆は人間が用いる塔婆の様式に準じていることが見えます。（**ハニイマカ**「キヤカラバア」は宇宙を構成している地水火風空を表し、**ウツクイ**を**ハニ**（オンアピラウケン）は密教における胎蔵界の大日如来の真言を表しています。また**ハニ**は金剛界の大日如来、**ウツクイ**（ハニイマカ）は金剛界の大日如来、**ウツクイ**（ハニイマカ）で地獄からの救済を表しています。

医療が発展した現在においても、出産は命がけの行いです。安産祈願のお守りが神社などで数多く売られているのは、安産への願いが人々の変わらぬ願いであることを示しているのだと思います。下総の農家のそばに展示していますので、ぜひご見覧ください。

(農家グループ 高原)



サガマタ（表面）

商家 酒・燃料の店 「にんにく酒作り」

房総のむらでは十五年ぶりに、にんにく酒作りが行われました。

にんにく酒は健康酒とも呼ばれ、疲労回復、食欲増進、夏バテ防止にも効く暑い夏にぴったりのお酒です。にんにくの他にも青しそや生姜、白ごまなどを使って作っていきます。

にんにくは薄皮をむき、蒸し器で三分ほど蒸します。蒸すことで強いにおいを抑えることができます。このため、にんにくのおいが好きな方は、そのまま使用しても良いそうです。

生姜は薄切りにして、青しそはよく洗い水気を取ります。果実酒も含めお酒作りのポイントは、食材についた水気をよく取ることだそうです。白ごまは一、二分ほど火にかけてます。房総のむらでは、焙じ器を使用しました。

にんにくを蒸している間にはんにくの、生姜を切っている時には生姜の、そして白ごまを焙じた際には香ばしい白ごまのにおいが漂い、体験者の方は鼻からも食材を染みながら作っていたと思います。

にんにく酒が健康酒と呼ばれることから想像がつくように、嗜好品より「薬」という面を大きく持っています。現在、私たちは具合が悪くなれば病院で処方される錠剤などの飲み薬を飲んで体調を治します。こういった西洋医学の流れの中で作られた

人工的な薬は、お酒との飲み合わせが悪いといわれ、副作用もあります。

一方、自然の恵みから作られる薬はお酒との相性がよく、普段も食べているもので副作用はほとんどありません。今でも風邪を引いたら卵酒を飲むという人がいるのではないのでしょうか。

体験では、調理した食材を順番に瓶に詰めていき、最後にホワイトリカーを注いで終わりとなります。にんにくの白さと青しその緑がさわやかに映え、見ているだけで涼しくなります。

すぐに飲めないのが惜しいところですが、一年ほど熟成させるとよりおいしくいただけます。

(商家グループ 大角)



2008年製作



2023年製作

風土記の丘資料館 考古学講座

「土偶について」

今回は、年四回企画した考古学講座の第二回目に当たります。八月二十七日(日)午後一時三十分から午後三時三十分まで風土記の丘資料館集会所で開催しました。

資料館のリニューアルに関連して、縄文時代の土偶をテーマに選び、講師に國學院大學講師の原田昌幸氏をお招きしました。「土偶について―土偶の発生と成長、そしてがたちの変化―」と題した講演でした。このテーマへの関心は高く、前の週から問い合わせが来ていましたが、開場する前から続々と人が集まり、会場は盛況でした。六十一名(定員六十名)の参加があり、内一人は祖父と一緒に参加した小学生でした。



熱気にあふれる開演前の会場

講演は、土偶の起源から盛衰について、時期(縄文草創期〜晩期)と地域の特徴を分かりやすく解説した内容でした。

講演の後、「土偶の時期ごとの特徴がどのように伝わったのか」という縄文時代の情報網に関する問題と、西日本で土偶が振るわなかった要因について質疑応答が行われ、講演内容の理解をより深めることができましたのではないかと思います。

途中休憩をはさんで、予定を三十分ほど超過しましたが、参加者は最後まで熱心に聞き入っていました。

次回は十月二十九日に国立歴史民俗博物館教授の林部均氏に埴生郡衙に因んだ話をお願いしています。

(風土記グループ 白井)



ハート形土偶を語る原田氏



ーボランティア活動記ー

「昔のくらしボランティア」

房総のむらでは、様々なボランティア活動が行われています。今回はその中から、昔のくらしボランティアについて紹介します。

昔のくらしボランティアは、上総と下総の農家のカマド、安房の農家のカマドとイロリを使い、昔の暮らしの再現を行っています。

房総のむらには上総、下総、安房地方の農家を再現した建物があり、いずれの建物にも炊事を行っていたカマド、イロリがあります。昔の農家では、カマドで米を炊くなど煮炊きをしていました。しかし、カマドに火が付いている間は、その場から離れてしまうと火が消えてしまうため、煮炊きが終わるまではカマドから離れることができませんでした。今では炊飯器を使うことで簡単にお米を炊くことができたり、ガスコンロやIHなど便利な調理器具が広まったことで、煮炊きしながら他の作業をすることができるようになりました。

ボランティア活動中は、実際にカマドとイロリに火を付けるため、来館者はその様子を見ることが出来ます。その際のカマドとイロリには、水が入った釜がかけられています。カマドやイロリを見て、「懐かしい」や「初めて見た」と話している来館者がいらっしやう、世代によって様々な感想がありました。

また、カマドとイロリに火を付けること

は、茅葺屋根の保全に効果があります。カ

マドとイロリから出る煙の成分によって

茅葺の屋根に潜んでいる虫を退治すること

ができます。安房の農家は、炊事する場所

と寝起きする場所が独立し、土間で繋がる

分棟型と呼ばれる造りとなっているため、

炊事する場所にあるカマドと寝起きする場

所にあるイロリの両方に火を点けて、茅葺

屋根を保全しています。このような茅葺屋

根を煙で保全する事を燻蒸くんじょうと言ひ、茅葺屋

根を保全するためにはとても重要な作業に

なります。

農家エリアにお越しの際は、カマドやイ

ロリに注目しながら見学してみてください。

(農家グループ 下村)



イロリ



まつり開催時の注意事項

まつり当日は駐車場が大変混雑いたします。公共交通機関をご利用くださいますようお願いいたします。

また、館内はテント類の設営、ボール等の遊具の持ち込みは禁止です。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

◇編集後記◇

今年の上半期は大変暑く、連日三十度を超える日が続いておりますが、演目や木々の色付きから、むらでは少しずつ秋を感じられるようになって参りました。

四月には長らく休館していた風土記の丘資料館がリニューアルオープンし、パワーアップした展示で皆様をお迎えしております。

新しくなった風土記の丘資料館も加えた房総のむらで、皆様のご来館をお待ちしております。

(広報・普及グループ 岩瀬)

令和5年度下半期のイベント

- 歴史の里の音楽会
10月8日(日)
 - 房総座
10月21日(土)
 - ふるさとまつり
11月3日(金・祝)
 - 北総江戸めぐり
11月19日(日)浦安市
 - 日本遺産北総四都市デー
11月23日(木・祝)
 - 伝統文化入門
12月23日(土)
 - むらのお正月
令和6年1月3日(水)・4日(木)
 - トピックス展「むらのけものたち」
令和6年1月20日(土)～3月10日(日)
- ※上記以外に多くの実演・体験をご用意しております。詳細は令和5年度体験のしおり、または当館ホームページをご覧ください。